

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第69号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)2月16日 金曜日

2018年(平成30年)2月16日 金曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、この2月に株式上場プロフェッショナルを養成し、IPOの経営者教育も行うスクール『IPOマスタースクール』を開校、校長就任



連載企画② 「東北アイデンティティ—発掘」 【“東北先史時代学”が目指すもの】

「東北先史時代学」 連載宣言

新年号で唐突に「東北先史時代学」創設を提唱した。しかし、中身についての説明はほとんどしなかった。東北復興と「東北先史時代学」の関係については触れたが、その中身についてはほとんど触れなかった。やはり、その中身や、あるいは目指すところについてもっと詳しく説明する必要があると思う。

なおかつ、震災7年目を迎え、東北復興も新たな再スタートを切らねばならないこの時期だからこそ、この企画を連載記事としていくことを宣言したい。またまた唐突ではあるが、連載宣言にあたって最初に筆者自身も含めて、東北に暮らす人たち、東北出身の人たち、東北の復興に関係する人たちに次の質問を投げかけたい。

しかし、この「東北魂」という言葉に突っ込みを入れた人はいないだろう。東北人であろうとなかろうと、なんとなくこの言葉に惹かれたのは確かである。しかし、この「東北魂」とはいったい何か、震災直後にあらためて「東北魂」という以上、現在は活性化しておらず、あるいは死んでいるというのか、なぜ復興と「東北魂」なのか、この「東北魂」が復活するかどうか、などにつ



よく見かけた。そのTシャツをプロデュースした人がどんな思いを込めてこの文字を使ったのかは知らない。また、震災直後には、

よく見かけた。このままでは、せっかくの「東北魂」というキーワードによる問いかけは何となく感覚的にフィットしているから発した言葉というだけで片づけられ、雲散霧消していきさう。そこで筆者は、この言葉を糸口に、「東北先史時代学」が何を指しているのかを説明していきたい。

そして、東北の魂は死んでしまったのか、まだ生きているのか、活性化させるためにはどうすればいいのかを追及していきたい。

スコットランド魂やカタルーニャ魂は分かるが「東北魂」は、イングランドからの独立を目論むスコットランドにはスコットランド魂があるだろうし、それはどんなものか聞いたら、スコットランド人なら誰でも知っているし、知っているというよりも身体にしみ込んでいくほどに明確なものだろう。そして逆にいまさら何を聞くのかと言われるだろう。カタルーニャ魂も同じであらう。愚問だと一笑に付

されるだろう。「東北魂」との差は歴然としている。この「東北魂」には明確な説明がつかない。当然、「東北魂」を体現しているという人にも会えないだろう。その魂が拡散しすぎて希薄となっているのか、元から存在していないのかについても、現在のところ明確な返答はむずかしい。スコットランド人やカタルーニャ人と異なり、「東北魂」とは何かとの質問にはみな答えに窮するだろう。

しかし、「東北魂」という言葉には何か知らないが揺り動かされるのだ。おそらく何も感じない東北出身者や東北在住者はいないと信じていた。

古来、東北に居住する人々は蝦夷(えみし、えびす、えぞ)と呼ばれていた。それは縄文時代からではなく、大和朝廷が成立したときからであった。大和朝廷から続く歴代の中央政権から見ると、蝦夷は、日本列島の東方(現在の関

まつろわぬ民



東地方と東北地方)や、北方(現在の北海道地方)、(現在の樺太)などに住む人々を異端視・異族視した呼称でもあった。

また「まつろわぬ民」とも言われる。「順わぬ」とか「服わぬ」とも表記される。征服者の側からすれば、「順わぬ」や「服わぬ」と位置づけられても、被征服者にとっては当然の抵抗であり、非帰順の姿勢である。この蝦夷については、平等を重んじ、権力を笠に着て圧政を押し付ける勢力に対しては徹底して反骨精神を貫くともいわれている。

こうした傾向は、何となく今の東北人の気質に通じるものがあるかもしれないとも思う。

最後のまつろわぬリーダー：アテルイ

日本史に登場する最後の東北のまつろわぬ民、蝦夷といえ、アテルイ、モレ

であろう。彼らは平安初期の東北蝦夷軍の軍事リーダーであった。数十年に亘る大和朝廷による侵略戦争を戦った末に、一時は大和朝廷に降伏した。朝廷を撃退して、優勢もなくなったが、度重なる大量の戦力投入と物量作戦で郷土も住民も疲弊し、抵抗のエネルギーも減退した末に降伏したのだ。

それが延暦二十一年(西暦802年)のことだった。それが東北原住民の最後の戦いであり、それ以降は征服者による長期間の略奪が続いた。

それから早や、1200年以上が経過したのである。いわば東北にとっての侵略と略奪の1200年といえる。

収奪対象であり続けた

これだけ長期に亘って略奪され続ける東北というのは、逆説的にいえば、さまざまな豊かさを有していたのだからともいえる。

略奪しても略奪しても尽きない豊かさを有していたから、長期間に亘って略奪されたともいえる。

表に出ていて、略奪されたものといえば、土地、金、鉄技術、日本刀技術、年貢としての米などであるが、おそらくそれだけではあるまい。

今後の研究テーマとして、表に出ていない豊かさも追及していこうと思う。やはり、土地、金、鉄技術、日本刀技術、年貢だけで1200年間も略奪するというのは無理があり、もっと別のものがあつたと考えるのが合理的である。

かつては豊かな東北

そうした略奪されたものを総合してみ、それを元通りにして、略奪前の東北



最後のまつろわぬリーダー：アテルイ像

を再現してみるのも今後のテーマにしたい。いまでは想像もできないかもしれないが、かなり豊かな東北像が導き出せるのではないか。そんな気がする。本来、蝦夷集団は戦いを好まず、自国の富をもって他国に侵攻することもしなかった。また自国が富んでいるという意識も持たなかった。そのため、その富を隠そうとしなかったため、無防備そのものに映ったであろう。

東北の先史時代

前頁にあるように、旧石器時代と縄文時代を通じて、東北の遺跡数はかなりの数にのぼる。筆者はさらに、東北での公共工事の少なからず、実際にほとと東北のこの時代の遺跡密度は高かったと考えている。

遺跡が多いということは、人が多かったということであり、そこからさまざまな文化が誕生していたはずである。それが東北の当初の豊かさであり、それが日本という国を造る礎になつて

日本古代史は書き換えられなければならない

いつの時代も、どこでも、歴史というものは勝者の側から都合良く書き換えられた歴史である。こうした点からいえば、極論に聞こえるかもしれないが、正しい歴史など存在しないと思う。

略奪され続けた東北の歴史はなおさらである。そしてその歪曲は今も続いている。したがって、埋もれた東北の先史時代から日本古代史の書き換えを始めよう。いまさまざまな考古学的発見により、その扉が開こうとしているので、この流れを止めてはならない。遠野の金取遺跡もある。他にも埋もれた先史時代の遺跡はもっともつとあるはずである。そこから、日本古代史の通説を覆していきたい。それは十分に可能である

東北アイデンティティ—発掘の旅は長い

ともかく、何か「東北魂」といえるものの存在をぼんやりと感じつつ、明確には答えられない状態をこのままにはしておきたいのである。突破口としての「東北魂」発掘から、東北のアイデンティティを探り当てたいと思う。

これも可能であると思う。この国の文化は東北から誕生したと言おう。これも十分に説明可能であると考えている。(続く)

東北から日本を変えるということ

最後に、東北は辺境文化ではないと言いつつ、この国の文化は東北から誕生したと言おう。これも十分に説明可能であると考えている。(続く)

東北から日本を変えるということ

最後に、東北は辺境文化ではないと言いつつ、この国の文化は東北から誕生したと言おう。これも十分に説明可能であると考えている。(続く)

東北から日本を変えるということ

最後に、東北は辺境文化ではないと言いつつ、この国の文化は東北から誕生したと言おう。これも十分に説明可能であると考えている。(続く)



大和朝廷の東北侵略の経緯

東北先史時代学の実践プロジェクト 長根貝塚保存活動開始

ボランティア個人による保存活動は可能か



国指定遺跡 長根貝塚 説明板

東北先史時代学は、考古学者のように発掘はしないが、かといって、机上の勉強会のみ運営とか、諸資料を編集しての研究活動や著作活動をするだけの活動を目指すものでもない。多くの同好の士を募って、この東北先史時代学のために沿った具体的な活動もしていきたいと考えている。その第一のプロジェクトとして取り上げるのは、放置状態にある東北の縄文遺跡の保存活動である。

最初に取り上げるのは、筆者の郷里である宮城県遠田郡涌谷町にある「長根貝塚」である。この貝塚は、今から47年ほど前に発掘調査され、国指定遺跡となったが、その後は完全に埋め戻され、石碑と説明板のみが、ここに貝塚があることを示すのみとなっている。宮城県でも有数の貴重な縄文貝塚で、三内丸山遺跡より古いにもかかわらず、こうした状態になっているのは嘆かわしいし、最新技術を用いた研究もこのままでは不可能である。

携などを図っていききたい。しかも民間ボランティアとして、この貝塚保存活動を開始していく。すでに考古学関係者のアドバイスも受けて具体的な活動を開始した。町の関係者にも接触を開始した。今後、この活動の経過報告も行っていく予定である。

とはいえ、国に働きかけて、この貝塚の再発掘と再調査をしようというのではなく、資金集めや、町を巻き込んで、自ら再発掘・再研究団を組織し、また町の観光資源としての活用。さらには東北の縄文時代の独自研究他の東北の縄文遺跡との連

涌谷町生涯学習課文化財保護班による長根貝塚解説

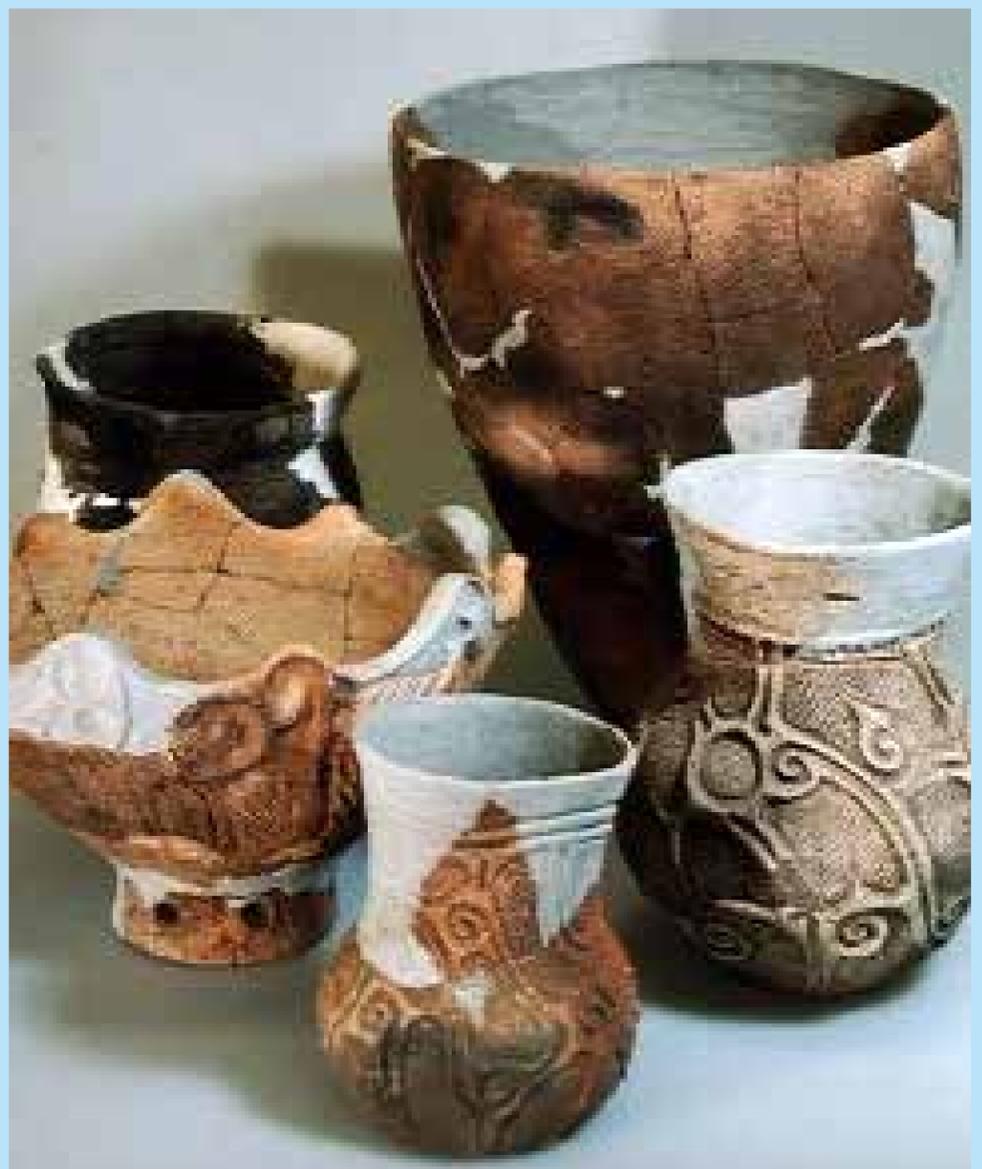
貝塚とは、長い年月の間に昔の人々が食べた貝の殻が堆積してできた遺跡です。貝塚には、魚や動物の骨など食料の残りかす、壊れた土器や石器なども捨てられました。長根地区にある長根貝塚は昭和43年に発掘調査された結果、東西300m、南北250mの範囲で「U」字の形に貝層が広がる、県内最大級の縄文時代の貝塚であることが判りました。貝層は縄文時代早期末から晩期(約6000〜2300年前)までの長期間にわたります。貝層の貝の種類を見ると、早期末頃の貝層はカキやハマグリなどの塩分が濃い水(鹹水・海水)で育つ貝が主体となることから、現在の小丘陵周辺の低地部は、海であったと考えられます。しかし、前期末から中期末頃の貝層はヤマトシジミなどの海水と淡水が混ざり合う汽水産の貝が主体とな



いまはすっかり埋め戻されている長根貝塚



貝塚の上では農業が営まれている



発掘土器の一部



マジョリティーの女性陣

女性パワー炸裂 第31回 三陸酒海鮮会 2018.2.3 渋谷焚火家

新年初の三陸酒海鮮会は、節分の日の二月三日に開催されます。
この会は2013年四月を第一回として、次回で三十一回目を数え、足掛け六年に亘るロングランの三陸支援の会となっております。
この間、開催場所の渋谷・焚火家のオーナーやスタッフの方々に支えられ、また数多くのご参加いただいた方々に支えられてここまでまいりました。
今後も引き続き、この会の存続と三陸被災地復興支援のために、ぜひご支援のほどお願い申し上げます。



東北地酒ラインアップ



豆と恵方巻



第42回 水産業再興のための 料理レシピ紹介

酒飲みには 垂涎ものの酒肴 《ニシンの 切り込み》



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 ニシン 500 g、麴 50 g、塩 20 g →ニシン 4%、砂糖 35 g →ニシン 7%、赤南蛮 輪切り少々

【作り方】

①ニシンを3枚におろし、骨をそぎ落とします。0.5センチの厚さに切ります。②5%の塩水にニシンを晒し、血抜きをします。5～6回、綺麗な水になるまで取り替えます。③麴をぬるま湯に浸します。(ラップをかけ、蒸らしておきます)④ニシンは、キッチンペーパーで、よく水分をふきとります。⑤麴に砂糖、塩を入れフードプロセッサーで軽く溶かします。(半分)⑥ニシンと麴を混ぜ合わせ、この時に赤南蛮の輪切りも入れます。3日～7日で食べれます。

写真でお伝えする

写真撮影:尾崎匠

東北の風景(冬の鳥・湖・雪山)



「平泉町観光振興計画」(案)への意見書

1月27日、28日の2日間、岩手県一関市で「第18回平泉文化フォーラム」が開催され、私も参加してきた。毎年基調講演、発掘報告、研究発表が行われ、平泉研究の最先端に触れることができるイベントである。

今回、1日目終了後の宿泊は、あえて一関市内ではなく、平泉町内にしてみた。これまで平泉は何度も訪れているが、訪れるのはいつも昼間だけで、夜の平泉がどのような感じか興味を惹かれたのである。また、2日目は午前中で終了だったので、終了後再度平泉を訪れた。2日間平泉を訪れて感じたことがいろいろあった。折しも平泉町が新しく「平泉町観光振興計画(案)」を作成し、それについての意見を募集していた。そこで、今回の平泉散策で感じたことや、以前から平泉観光について考えていたことなどについて意見書としてまとめて、平泉町観光商工課宛に送付した。

以下がその意見書である。
「平泉町観光振興計画(案)」を興味深く拝見しました。その上で考えたことについてお伝えしたいと思います。要点は以下の3点です。
①世界遺産以外の観光資源の活用について
②平泉観光において連携すべき相手について
③「夜の平泉観光」の仕掛けについて

①についてですが、私は今回、一関市内で2日間開催された「平泉文化フォーラム」に出席しました。その折に、1日目の宿を平泉町内に取り、また2日目終了後に久しぶりに平泉町内を散策しました。その際に感じたことは、端的に申し上げれば、平泉観光は現在、あまりに世界遺産に頼り過ぎているのではないかと感じています。平泉町内の

光案内所で入手できる町内のマップには、世界遺産の構成遺産5つと追加登録を目指している達谷窟毘沙門堂、柳之御所遺跡、それに高館義経堂などが掲載されています。今回の「平泉町観光振興計画(案)」の「1-2 主な観光資源」のうち「1-2-1 史跡・名勝」として挙げられているのもこれらですし、「資料4 平泉町の観光資源の再確認」で挙げられているのも概ねこれらですが、平泉の観光資源はそれらに留まるものではありません。

白山妙理堂や熊野三社は奥州藤原氏と白山信仰、熊野信仰との関わりが感じられて興味深いですし、照井堰なども高館合戦の折にその名前が登場する照井太郎高春の伝承があり、興味を惹かれます。歴史好きにとっては、芭蕉の「おくのほそ道」にも出てくる泉ヶ城(和泉が城)も目にしたい場所でしょうし、国衡や高衡(隆衡)の館の比定地もあります。四方に配置したという鎮守社跡を巡るのも楽しそうです。

これらは現在学校であったり民有地であったりとして観光スポットとするには難しい面もあるでしょうが、園地として整備せよとも今の伽羅御所跡のように、可能な場所に案内板を設けるだけでも散策ルートとなり得ることでしょう。

そうした隠れた観光資源についても積極的にPRしていかなければ、平泉は一度来て構成遺産を一通り見たらそれで終わり、二度とは訪れないスポットとなってしまうか悩まれません。そうではなく、最初は有名な世界遺産、その次は少しマニアックな、ディープな場所を巡る、というように、次にも来る楽しみがあるようなことが分かる情報提供が必要であると考えます。

今回、観光案内所におられたガイドの方に「世界遺産と達谷窟、柳之御所、義経堂以外にどこか見るべき場所はありませんか？」と尋ねたところ、「それらを見ているならあとは特にないねえ」とのお返事で、少し残念な思いをしました。

私としては、「平泉は単に世界遺産だけの町ではない」ということを強く訴えたいです。他にももっと面白い魅力の場所が平泉町内にあります。まずは地元の方々からそのことを再度確認していただければと思います。

②についてですが、「4-1 観光施策の内容」では、「基本方針3 広域連携による平泉町の魅力の向上」という伝承がある秋田県鹿角市、その他奥州藤原氏時代の金山があったと考えられる東北各地の自治体も連携の対象となり得ます。また、平泉の柳之御所遺跡で多数出土することから「平泉セット」と名付けられた、平泉型づくねかわらけや白磁四耳壺が出土する遺跡が、青森から福島まで、平泉以外にも東北地方にはた

くさんあります。これらの遺跡を有する自治体とも連携して、平泉遺産の面的な広がりを重視していただければと考えます。

平泉の歴史遺産は平泉だけのものではなく、かつ平泉の歴史遺産は平泉だけに留まるものではありません。平泉とこれらの地域とをつないで共同で行う観光キャンペーンや情報発信などを通じて、平泉と関係する自治体とがWin-Winとなるような方をぜひ講じていただきたいと思います。

③についてです。「2-1 2町の観光の問題点・課題、可能性」の中で、「多くの観光客が通過型の観光」と指摘されていますが、私も実は平泉町内に宿泊したのは初めての経験でした。平泉にはこれまで何度か足を運んでいますが、いつも昼間のうちに町内を回り、夕方には移動するという形でした。

その理由を考えてみますと、まず宿泊できる場所の少なさがあります。ツアー以外の個人客が宿泊場所を探る際に利用するのは多くは「楽天トラベル」や「じゃんネット」などの宿泊予約サイトであると思われるのですが、平泉町内の宿泊施設は「楽天トラベル」、「じゃんネット」とも3軒の登録にとどまります。それ以外の宿泊施設については、平泉町観光協会のサイト内で紹介されていて、少なくとも町内には7軒の宿泊施設があることが分かりますが、「平泉町 宿泊」で検索

しても平泉観光協会のサイトは30番目(つまり3ページ目の一番下)にようやくヒットする状況で、これでは恐らくあまり見てはもらえないことでしょう。町が後押しするなどして宿泊サイトへの登録を進めることや、町内の宿泊情報がより上位にヒットするような対応策を講じることが必要と考えます。

宿泊できる場所の数を増やす手段として「民泊」の活用も考えられますが、その際にはそれぞれの民泊場所の特色があることによりよいです。例えば、「平泉の古老から平泉の歴史について話が聴ける民泊」などがあるれば、歴史好きの観光客は「ぜひ泊まって話を聞いてみたい」と考える可能性が高いです。

もう一つ平泉観光が通過型に留まってしまう理由として、夜楽しめる場所がないということが挙げられます。平泉町内の飲食店は多くが夕方までに閉店してしまい、夜は一部の居酒屋や焼肉店が営業するのみだということが今回分かりました。この現状では、夜も平泉で過ごすという行動にはなかなかつながらず、平泉を過ぎ去るという行動になりがちです。「平泉夕食堂」のパンフレットも入手して、その部分の改善に取り組んでいる様子も窺えましたが、それでも大半の店は19時くらいまでの営業であり、その時間帯であればその後の移動もできてしまうため、滞在することにながらるかどうかは正直微妙なところではあります。

昨年できた「ザ・ブリュワーズ平泉」がこの1月から「夜カフェ」を実施し、3日前までの予約が必要ではあるものの、予約客が1人でも「夜カフェ」が「500円で地ビールを含む飲み放題もつけられる」という取り組みを始めたことは注目に値します。このような特色のある取り組みをより多くの店が始めれば、夜の平泉の魅力はさらに増します。

夜の平泉を今回初めて散策しましたが、観自在王院辺りの道は周囲の建物と柔らかな光の街灯とがマッチして、とても風情があるように感じました。このような雰囲気づくりを町内のさらなる多くの場所に広げたい。例えば週末の夜は駅から毛越寺に至る道の両側に篝火を焚くなど、夜の平泉散策が楽しくなるような仕掛けを施したりすることによって、平泉に滞在する人はより増えるのではないかと考えます。

この手の意見募集というのは、「広く意見を求めてそれらも取り入れて作り直した」という体裁を整えるために、半ば形式的に行われることが多く、今回提出した意見書の内容もどれほど参考にしてもらえるものか不明ではあるが、とりあえず私としては、感じたこと、考えたことについては概ね伝えられたつもりでいる。

平泉を散策した当日のFacebookに、「プラプラして思ったのが、平泉は世界遺産に頼りすぎじゃないか?」と書いた。友人の西川さんが「黒毛和牛ステーキ屋なんかも黒毛和牛であることに頼り切ってる店が多くて、独自の価値観を訴求できる店がほとんどないんですよ」とコメントしてくれた。平泉が「黒毛和牛である」と以外PRできないステーキ店になつてはいけない。それは平泉の魅力が矮小化してしまうことになる。

西川さんは関西出身で現在仙台で仕事をされているが、東北の湯治宿に魅せられてご自身のサイトでその魅力を余すところなく伝えてくれている。その西川さんはこうもコメントしてくださった。「地元へのヒトはえていささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。」

以上3点について意見を述べさせていただきました。平泉を大事に思う同じ東北の一人の意見として、いささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。

以上3点について意見を述べさせていただきました。平泉を大事に思う同じ東北の一人の意見として、いささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。

以上3点について意見を述べさせていただきました。平泉を大事に思う同じ東北の一人の意見として、いささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。

以上3点について意見を述べさせていただきました。平泉を大事に思う同じ東北の一人の意見として、いささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。

以上3点について意見を述べさせていただきました。平泉を大事に思う同じ東北の一人の意見として、いささかなりとも参考になるのであれば幸いです。今後平泉が、東北の一つの時代の在りようを伝える貴重な場所として、たくさんの方に知られ、訪れられる場所であり続けることを願っております。

執筆者紹介

大友浩平

(おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnas5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

東北の本能的な アナキズムの事

今年も、三月十一日が近づいて、私は当時の寒さとひもじさ、怖ろしさを思い、もはや未来はないかとすら思われた東北そして仙台の街に、今も生きて住む事ができている事への驚きと感謝を新たにするのである。

二〇一一年、冬のあと。私はかの一連の災害の中で、大切な家族や友人も、主だった財産も失わずに済んだにもかかわらず、心の中の何か明らかに大きく変化しました。現在に至っている。例えばおそろく福島の子力発電所事故に伴う社会の動きからだろうか、

「政府とは信用ならぬものであり、依存せず、また盲



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

従もせず必要あれば反抗する行動も必要である」という意識をかなり堅固に持つようになった気がする

し、震災直後の生活の混乱、いわばサイババル的な体験からだろうか、「人生において本当に必要なものは何なのか」と常に考えるようになった。ステイヴ・ジョブズが言ったように、「今日が人生最後の日だとしたら、今日やる予定の事を本当にしたいと思うか」と、常に己に問うようになったのである。

考えてみれば、このような自分の状況には、どこか心当たりがあった。戦後の混乱期に書かれ、一世を風靡したと言われる坂口安吾による『墮落論』である。「特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変わりはない。ただ人間へ戻ってきたのだ。(中略)墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは、上皮だけの愚にもつかない物である。」

安吾自身、元来に既成の社会を疑う反骨気質を持ちながらその個性を作品に開花させていたが、戦争と

いう破壊と混乱がその精神と筆致を高みへと押し上げ、社会もまた彼に共鳴し追いついていった、と言えるかも知れない。「墮ちきる」とは即ち、人それぞれが己の仮面や虚飾を剥ぎ取り、根本に立ち戻るといふ事だろうか。安吾の形式を度外視した荒っぽい文体から感じるのは、本当の自由を追究し勝ち取ろうとする闘志である。私はそこに「アナキキー」という概念を連想せずにいられない。

私が「アナキキー」なる言葉を知ったのは、中学の頃チャップリンなどの古い映画を好んだ事から手に取った文庫『世界の喜劇人』(小林信彦・一九八三 新潮文庫)においてである。この本でまさにアナキキー(無秩序的・無政府的)と形容されたのが、米ニューヨーク出身のヴォードヴィル即ち舞台ショービジネスで鍛えられた喜劇映画スター、マルクス兄弟であった。チャップリンもまた、ヴォードヴィル出身であり、マルクス兄弟とは共通点が多い。両者は実は同世代なのだが、チャップリンがサイレント(無声)時代に映画の黄金期を作り上げ、トニー(音つき)の時代になってようやくマルクス兄弟が映画界へ進出した。もともとチャップリンがサイレント時代に演じた有名な「放浪者」こそが、貧しく、下品で暴力的、富裕層や警

察官までを敵にまわし戦う「不良成年」すなわちアナキキーな存在そのものであった。しかしトニーとなりチャップリンは偉大な芸術家・思想家へと成長、演じる「放浪者」の姿から「不良・悪党」の影は鳴りを潜める。代わって登場し今度は徹底的にアナキキーな笑いの路線を貫いてみせたのがマルクス兄弟だった。初期のチャップリン、そしてマルクス兄弟は何ゆえにアナキキーであったか。やはりそれは彼らの幼少期にも共通する貧困の経験から来る性格だったのではないか。「明日はどうなるかわからない」「政府など当てにはならない」という傍目には不安定な危機的状況ながら強い自立的意志に裏打ちされた思想。まさに東京空襲を生き延びた安吾の、そして他ならぬあの日の大地震と大津波、原発事故を生き延びた東北の人々の心境に通じるものがある。しかしそれならば、このアナキキーという性格は、千年に渡って理不尽な政府に振り回され、しばしば困窮の辛酸を舐めてきた東北人にとつて、極めて普遍的な本質的なものではないだろうか。

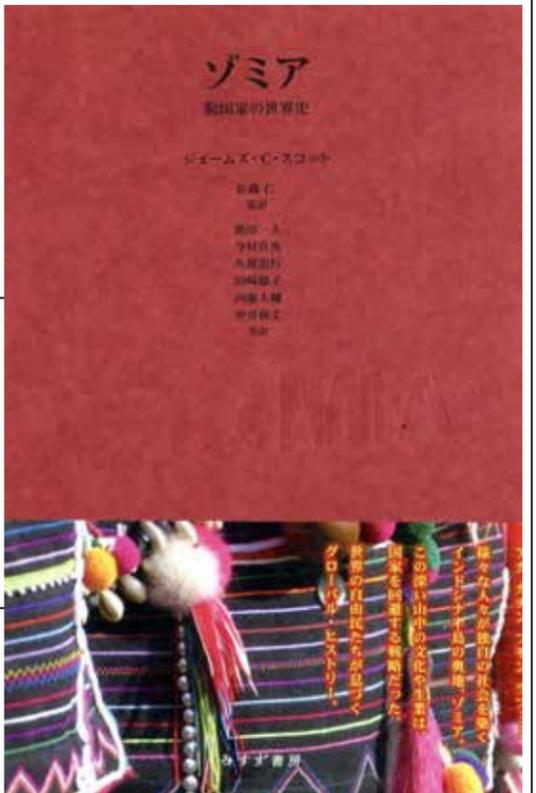
ところでアナキキーとは個人の信条にとどまらず理想の社会の形を目指す政治思想『アナキズム』として十九世紀より存在していたのを知ったのはずっと

後になっての事である。現在では社会を変えよう、暮らしを変えようとする選挙の風景ですらまず聞く事もない、このアナキズムとは一体何なのだろうか。多くの人には文字通り「無政府状態」即ち政府の支配なしで民衆自身の管理によって運営する社会を理想とする共産主義、さらには実際に暗殺行為などの暴力に訴えた者がいた事から「極左」「テロリズム」を想起させる思想傾向だという。しかし本来は非暴力・非侵害を旨とし、また共産社会を目指しながら結局は労働者自身による支配・独裁に走るマルクス主義とは対立してきた長い歴史がある。本当の意味で共産主義社会が実現した例が未だないように、アナキズム自体が支配からの自由を求める多様な思想の総称であつて大勢が団結し実現するにはイデオロギーとしての汎用性に乏しい。そこに菌瘴さ、難しさがあると言えるだろうし、逆にその自由さ、多様さに無限の可能性を感じるのである。

随分以前、私は本誌に九州と東北という日本両端の地方の、一見似ていながら決定的に違う性格として、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』とそれをモチーフに松本零士が描いた『銀河鉄道999』を引き合いに出した。東北人・宮澤の銀河鉄道は既成の世界を超越した「異

界」を走るのに対し、九州人・松本のそれはあくまで実際の宇宙に未来のテクノロジーで設置されたレール上を行く。そこには実際に日本という国を動かして社会を作ってきた九州と、全く逆に常に日本という枠組にとられず故に歴史的に九州的な圧政主義に戸惑い、逃避し、時には反抗してきた東北との対比がある。その東北における最も象徴的な出来事の一つが、十二世紀の平泉建設であり、また十九世紀の奥羽越現藩同盟結成だったろうと思う。平泉はそれまでの長きに渡る朝廷による支配と戦禍に終止符を打つ為、浄土という異界のルールを地上に持ち込む事によって理想の社会を実現した。奥羽越現藩同盟もまた、西方から押し付けられる国家の枠組を否定し、全く異なる社会を北方に築こうと発展していったものである。いずれも列島の他の地方では考えつかぬような点でもないアイデアであり、これは取りも直さず東北という地に根本的に、支配や強権政府を警戒する自由主義・意識せざるアナキズムが息づいてきた証左とも言えるのではないだろうか。

アナキズムが世界で試された実態を見ていくと、まず想起されるのは近年独立運動で話題となったスペイン・カタルーニャ州である。一九三〇年代、ソ連の



脱国家の世界史『ゾミア』 ジェームズ・C・スコット著 2013年

このようにアナキズムの運動は血なまぐさい歴史に彩られているが、一方で暴力を介入させずして、現在も維持されているコミュニティや地域が存在する。デンマーク国内のクリスチヤニア、そしてベトナム・チベットの高地から中国や一説にはアフガニスタンにまで及ぶというゾミアと呼ばれる地域がそれである。クリスチヤニアはコペンハーゲンに放棄された軍施設内に住み着いた人々が独自のルールで一九七一年に「建国」し、政府も介入しない自治が続けられており、まるで嘗て井上ひさしが東北の一地域に想定し小説化した「吉里吉里国」を思わせるものがある。

一方のゾミアとは、広大な高地に一億人もの極めて多様な民族が住み、相互扶助と平等の下に「国家」のない自治が為される地域だ。驚くべきは、国家の収奪を逃れる為に人々が選んだのが、一揆などの武力行使で

東北は日本という国家の一部であり、そうでなければ存続できない、と考える人がほとんどだろう。しかし平泉藤原氏が滅ぼされた十二世紀以降、東北は日本に取り込まれたのではなく、「国なき国」「王なき国」となったに過ぎない、と考える事はできないか。・というの、私の長年の想いである。国家という枠組に捉われぬ、蝦夷以来の隠された本能を、忘れずにいよう。いつの日かここ東北にこそアナキズムの新たな機軸が示され、むしろ国家の袋小路から人々を救う事にならぬ保証もあるまい。

はなく高地へ「逃散」し、尚且つ旧来の生活を守る事で国家を介入させず、また国家発生の防止をも維持する、という道だった事。これもまた、広大な大地と森に住む事で国家の支配を拒んだ古代東北の蝦夷たちを彷彿とさせずにおかない。

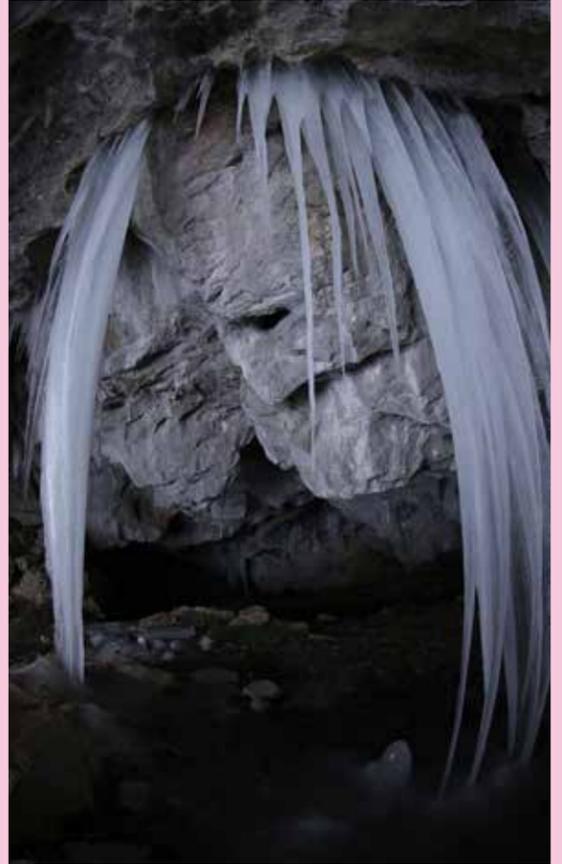
東北は日本という国家の一部であり、そうでなければ存続できない、と考える人がほとんどだろう。しかし平泉藤原氏が滅ぼされた十二世紀以降、東北は日本に取り込まれたのではなく、「国なき国」「王なき国」となったに過ぎない、と考える事はできないか。・というの、私の長年の想いである。国家という枠組に捉われぬ、蝦夷以来の隠された本能を、忘れずにいよう。いつの日かここ東北にこそアナキズムの新たな機軸が示され、むしろ国家の袋小路から人々を救う事にならぬ保証もあるまい。



霧氷2



氷筍



ちょっと怖い



「しぶき氷」

もう暦では立春だというのに全国的な寒波で大騒ぎである。寒がりの筆者は、適当な避寒地があればいますぐ飛んで行きたいほどだ。こんな寒波のなかでは遠野の寒さもあまり目立たないのではないかと少し心配していたが、今回号の写真

シリーズ 遠野の自然 「遠野の立春」 遠野 1000 景より

を見れば安心である。
* 超広角レンズで撮ったという鋭く長いツララ画像はまるで魔物のキバのようだ。氷筍も久しぶり。一度お目にかかりたい。
霧氷2は自然の妙。よほどの吹雪だったのだろう。しぶき氷も久しぶり。「遠野の冬のワニ」に会えた。ワニに続いてガマ岩。子供時代に見た忍者映画の巨大ガマを思い出す。
厳寒の風景もすばらしい。カワラヒワの鮮やかな色がとてもまぶしい。
東京ではほとんど見かけなくなったどんと祭はうらやましいかぎりだ。



厳寒 高清水



ガマ岩



どんと祭



カワラヒワ